英雄の遺産

りょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄の遺産

【Ｎコード】
Ｎ０８１１Ｚ

【作者名】
りょう

【あらすじ】
アークス王国の騎士ダレンバートは、１０００年前に活躍したという英雄の遺産を継承する儀式に強制的に参加させられようとしていた。事の首謀者である第三王子ジークマイヤーを恨みつつ、彼は儀式のため英雄の一人が住んでいたという遺跡に入るのだが……。
※主人公最強気味のバトルメイン逆ハーファンタジー（路線変更の可能性有り）

第０話（前書き）

初の投稿ですので、拙い部分が多々あるかと思われます。取り敢えずプロローグですので、短めです。

第０話

今より遥か昔の龍王歴５２年。
世界は魔物の侵攻により滅びの危機に瀕していた。魔物は元来統率性など無く、それぞれの群れが思い思いに行動する種族である。人間よりも数段優れた身体能力や凶暴性を秘めてはいるが、種の存続の危機に追い込まれるほど存在ではない。

しかし、どこからともなく現れた“魔王”と呼ばれる存在が世界中の魔物を引き連れ、一斉蜂起したのだ。
彼、或いは彼女、否、そもそも性別があるのかすら不明なその者は、一体何の目的があって蜂起したのか戦争が終わってから途方もない年月が経った今では、資料が殆ど失われており誰にも分からない。
ただただ彼等魔物は、数多くの人間や亜人達を虐殺し、凌辱の限りを尽くした。魔物との戦争は１００年もの永きに渡り続き、人々の希望も費えようとしていた。

そんなとき、英雄が現れたのだ。

“勇者”アルトリウス。
“剣王”ジナ。
“魔女”カタリナ。
“聖女”マリアンヌ。

“魔人”ベリアル。

後に“五大英雄”と呼ばれる彼等は破竹の勢いで魔物の軍勢を撃破し、ついには魔王すら撃退してしまったとのことだ。

魔王との戦いは一国が焦土と化してしまうほど激しい戦いだったのではないかと言われ、現在でもその残滓と思われる巨大なクレーターが残されている。

平和が訪れた世界での彼等のその後は定かではなく、一国の王となった者、放浪の旅に出た者、ごく普通の家庭を築いた者、行方知れずの者など様々であった。

その後現在に至るまでの約９００年間、相変わらず魔物の驚異に晒されながらも、比較的平和な世界だったが、今異変が起きようとしていた。

「五大英雄、ねぇ……」

手に持った分厚い本を閉じながら、ダレンバートは呟いた。
ここは王都シュレイヤの王城内にある図書館。ダレンバートが手に持っているのは五大英雄と魔王との戦いが事細かに書かれた、鈍器と見間違えそうな本だ。
内容はある程度学のある国民であれば誰もが読んだことのある絵本を、無駄に難しく、細かく書いただけのものである。
細かくとは言っても、１０００年も前の出来事であり、全てが学者達の都合の良い想像を元に書かれたトンデモ本だ。

（実際には名前も合ってるか怪しいし、そもそも5人いたかも……いや、戦争があったのかも微妙なところだ）

この国の騎士団の実力者であるダレンバートは、これまで数々の魔物との戦いを潜り抜けてきたが、正直言って魔物が文明を崩壊させる寸前まで猛威を振るったとは到底思えなかった。
勿論、魔物は依然驚異であるし、放置すれば村や町が魔物に壊滅させられる危険性はある。しかしながら、騎士団や“魔法士”がいれば十分に対応できるレベルの驚異だ。ここ１００年間で最大の犠牲は町一つ壊滅というものであるが、それも大きな町ではなかった。
もしかしたらこの広い世界のどこかに強大で凶暴な魔物がいるの

かもしれないが、いるのであればとっくに姿を現しているはずだ。
ダレンバートは溜息を吐きつつ、本を所定の位置に戻した。
と、同時に、図書館の扉を開ける者がいた。

「ダレン、こんなところにいたのか」

ダレンバートのことを気安くダレンと呼ぶのは、この国の第三王子ジークマイヤー・アークスだ。
晴れ渡った天空を思わせる碧眼に、妖精が具現化して纏わりついているのではと思われる金色の髪。そしてあらゆる女性を惹き付ける甘いマスクを、その無駄に整った顔に貼り付けている。
ダレンバートも整った顔立ちではあるが、まさに美男子であるジークマイヤーとは違い、どちらかといえば“男らしい”と表現される、少々粗野な顔立ちだ。

「ジークか。お前公務はどうしたんだよ。こんなところで油売ってて良いのか？」

王族に対して不敬罪とも取られかねない言動だが、二人は物心着く頃から共に過ごした親友ということもあり、プライベート限定で気さくに話している。最も、取り巻きの貴族の多くは、「下級貴族のくせにけしからん」と鼻を荒くしているが。

「休憩休憩。ずっと執務室に詰め込まれてたんじゃ適わないよ。

そんなことよりも、親友の様子が心配でね。もうすぐ“儀式”だろう？」

とても心配しているとは思えない胡散臭い笑顔で宣う。それを見てダレンバートの顔が不快気に歪んだ。

「そんな埃と煤だらけの行事なんざ、とっとと廃止にすれば良いんだよ」

「何言ってるのさ。大事な行事だよ？　五大英雄から遺産をもらうという、ね」

ジークマイヤーの言う儀式とは、彼の言う通り五大英雄から遺産を継承するというものだ。ただ内容が面倒なことに、五大英雄の一人である魔女カタリナが住んでいたと言われている遺跡に入り、奥からカタリナの遺産の一部を持ってくるというものだ。

遺産にはものにもよるが特別な力が宿っており、所有者にあらゆる恩恵が与えられるのだという。

ただ、遺産を継承するというよりは、完全に墓荒らしの類の所業である。

「いらねーよ、んなもん。俺には剣と自分の魔法があれば十分っだっつーの」

「まーまー、しょうがないでしょ選ばれちゃったんだから」

この儀式は５０年周期で行われており、国内でもトップクラスの魔法士にのみ許された、非常に栄誉のある儀式である。それをダレンバートは要らないと言ってのけた。他の騎士からすれば考えられない冒涜である。

「お前が推薦したから選ばれたんだろーが！！　しかも反対押し切って無理矢理押し込みやがって！！」

今回の儀式には武に長けていると言われている第二王子か、果てまた将来有望なアークス王国騎士団第１師団団長が選ばれるかと思われていた。ダレンバート自信もそう思っていたし、そうあるべきだと考えていた。

しかし、そろそろどちらかに決めようか、というときにジークマイヤーがダレンバートを推薦、ごり押ししてきたのである。それを聞いた第二王子は辞退し、同じく第１師団団長も候補から外れることとなった。

ダレンバートはそんなこと望んでもいなかったし、頼んでもいない。ある日ジークマイヤーが「お前、遺産の継承者で決定だから」と告げてきたのは、まさに青天の霹靂であった。

「あれ？　そうだっけ？　まぁ近隣諸国への牽制も含んでるから、ま、頑張ってよ」

騎士団の面々なら竦み上がる怒鳴り声も、ジークマイヤーには全く効かなかったようで、涼しい顔をして図書館を出て行った。ジークマイヤーが出て行った後も、図書館の出入り口を親の仇であるかのように睨み付けていたダレンバートだったが、やがて諦めて深い溜息を吐き、すごすごと自分の兵舎へと戻っていった。

第０話（後書き）

次回更新は明後日以降。

第一話　魔女の遺跡（前書き）

ちなみにダレンバートは主役ではありません。悪しからず。

第一話　魔女の遺跡

暗い、暗い、暗い。

寒い、寒い、寒い。

恐い、恐い、恐い。

誰か、誰か、ダレカ。

タスケテ

「大丈夫かい？　魘されてるよ」

瞼を開けると、白光が視界一杯に広がった。あまりに眩しいのでしばらく目を閉じ、光に慣れた頃おそるおそる目を開けた。

「おはよう。悪夢でも見たのかい？」

目の前には自分を柔らかい笑顔で見下ろす――――がいた。
確かに悪夢を見たが、もう恐くはないし、どんな夢だったかも忘れてしまった。
自分を見下ろす――――を安心させるため、笑うことにした。

「大丈夫そうだね。身体を起こそうか」

――――は自分の体の下に手を差し込み、壊れ物を扱うかのようにそっと上体を起こした。そして今度は愛おしそうに自分の髪を撫で始めた。

「体調は良さそうだね……。このままならいけそうだ」

嬉しそうに微笑みながら、髪を撫で続ける。不快ではなく、寧ろ心地良いのでされるがままにしておく。

「あぁ……。もうすぐ、もうすぐだよ」

大切な僕の愛しい――――

五大英雄の一人である魔女カタリナの遺跡は、王都から馬車で3日ほどの場所にある。鉄道でも走っていればすぐなのだが、残念ながら遺跡は辺境にあるため経済的な理由から鉄道を引いていない。
なのでダレンバートは碌に整備されていない道を馬車で移動することとなり、深刻な尻痛に悩まされていた。

「神聖な儀式に向かうというのに、何で安物の馬車で行かなきゃならねーんだよ……」

というのも、自費だからである。
しかしダレンバートの実家であるスナイダー家は下級貴族だが金だけはある。それが何故安物の馬車を使っているのか。端的に言ってケチだからだ。
ダレンバート自身はさほどケチではないのだが、ダレンバートの

父親が「見栄を張るための馬車は1台で十分じゃね？」といって、倉庫に眠っていた馬車を引っ張り出してきたのだ。
乗り心地は当然最悪で、3日間の旅路に耐えられるかどうかも甚だ疑問だった。

「でもまぁ、何とか着いたな」

そう言って馬車の中から目的地を眺める。
魔女カタリナの遺跡は、最寄りの町から1時間程度の森の中にある、灰色の直方体の巨大な建造物だ。ダレンバートはこんな飾り気のない建造物を見たことがなかった。おそらく世界広しと言えど、こんな建造物はここにしか無いだろう。
目的地に到着したため、馬車の中から降りた。今のダレンバートは簡素な鈍色の鎧姿だ。何故かこの儀式は遺跡の中を一人で進むという掟があるため、全身を覆うような重装ではなく、要所だけを覆う比較的軽装と呼べる鎧を選んだ。貴族が身に付けるような鎧ではないが、これで十分だろう。
後は特に装飾されていない長剣を腰に帯び、携帯食料や医療品が入っている鞄を背負っているぐらいだ。

目的地にはすでにジークマイヤーを始めとして、貴族や騎士、王国の重役達数十人が待機していた。彼等は５０年に一度という儀式を一目見ようと集まってきた暇人達だ。
一応、ジークマイヤーや一部の重役達は儀式を執り行う責任者ではあるのだが。

「ダレンバート・スナイダー男爵、よくぞ参られた。そなたはこ

れより我がアークス王国にとって最重要とも言える儀式を受けるのだが、覚悟はできているな？」

一応は公式とも言える場であるため、ジークマイヤーは普段の巫山戯た胡散臭い微笑みを引っ込めていた。

となれば当然ダレンバートも礼儀をある程度弁えてないとならないので、跪くことにした。

「無論です、殿下。必ずや魔女カタリナの遺産を持ち帰ってご覧にいれましょう」

心の中では、「メンドクセーからそこいらに落ちてるテキトーな石でも持って帰ってこよう」と考えているが、その他大勢には知る由もない。もしかしたらジークマイヤーだけは気が付いているかもしれないが。

「では、遺跡の鍵をそなたに預ける。健闘を祈る！！」

ジークマイヤーの激励（上辺だけ）と長方形の薄い遺跡の鍵を受け、ダレンバートは遺跡の入り口へと向かっていった。

入り口といっても建物の四方は灰色のっぺりとした壁であり、見た目にはどこが入り口なのかさっぱりわからない。しかし、ダレンバートが建物に近付いた時、壁の一部が独りでにスライドして中に入れるようになったのだ。

ダレンバートも原因はよく分かっていないが、とにかくジークマ

イヤーから渡された長方形の薄い鍵があれば中に入れるらしい。逆に、鍵が無ければ何人も入ることができず、またどのような兵器、魔法を持ってしても壁を打ち破ることはできないのだという。
最寄りの町からさほど離れていないのにも関わらず、儀式以外で人間が入ることができないのはこのためである。

ダレンバートは軽く深呼吸をしてから、遺跡の内部へと入る。ダレンバートが中に入ると入り口は自動で閉まり、真っ暗闇になったかと思うと、すぐに内部が明るく照らし出された。内部も外壁と同じく灰色で、月日の経過のためかところどころ劣化してひび割れ等が目立ち、また多少散らかっている。
どのような仕組みかわからないが、遺跡の中は概ね明るい。事前にある程度聞いてはいたものの、実際体験してみるとますます不思議である。

「英雄の遺産、か。この明かりが勝手につく仕組みでも持ち帰れば、それだけで遺産になりそうだがな」

けれども仕組みがわかっていない以上、持ち帰ることもできない。仕方がないので、取り敢えず内部を適当にぶらついて適当にものを見繕って適当に帰ろうと判断した。

内部は他の一般的な遺跡とは違い、迷路のような複雑怪奇な構造はしていなかった。が、構造がシンプルすぎて逆に迷いそうだった。目印らしいものなく、ひたすら殺風景な遺跡だ。

他の遺跡であれば魔物が住み着いていたり、侵入者を撃退する罠が張り巡らされていたりするのだが。

まぁ、ダレンバートは騎士であり任務で遺跡を探索することもあるが、世間一般の冒険者ほど探索するわけではないので断言はできない。

「まぁ、入り口が開かないから、侵入も許さないんだろうな」

楽で良いが、それはそれで退屈だ。ダレンバートは戦闘狂ではないが、やはり騎士たるもの、体を動かしたい時もあるのだ。

「しっかし本当に何も無いな。適当にそれっぽいもの持って帰ろうかと思ったが、それすら無いってどういうことだよ」

ダレンバートは各階を隅々まで探索し、何も無いのを確認して上の階へ上の階へと進んだ。しかしあるのは崩れた壁や壊れたと思わ

れる原型不明のモノ。
このままでは今日中に帰ることができない。
「疲れたな……。取り敢えずこの辺で一呼吸置こうかな」
壁に背を預け、一息つこうとしたときだった。
――カチ
何かを押したような感触を背中に感じ、咄嗟にその場を飛び退いた。
（まずった！　トラップの仕掛けを発動させたか！？）
すぐに身構えるも予期した罠の類はなく、先ほどもたれ掛かった壁が開いただけだった。
中は大人一人が寝ころんで十分くつろげる程度の広さだ。
中に何も無いのを確認し、恐る恐るダレンバートは中に入ってみた。すると入り口が閉まり、若干の浮遊感をすぐに感じた。
（やはり罠だったのか！？　しかもこれは……この部屋自体が下に向かってる！？）

得体の知れない部屋の中にあっさり入ってしまった自分の迂闊さを呪いつつ、次に何が来るか身構える。
しばらく浮遊感を感じた後、壁がまた開いた。
また罠か？　と思ったが、このまま中にいても埒が開かないだろうと判断したダレンバートは外に出ることにした。

「ここは……」

今度は今までの荒れていただけの無機質な部屋とは違い、様々なものがあった。
用途不明の鉄製と思われる四角形のモノ。タイプは普段ダレンバートが使っているものとは違うが、椅子や机と思われるモノ。更には、人一人が余裕で入る円筒形の割れたガラス筒。
多少荒れてはいるが、先ほどまでとは比べものにならないぐらいに当時の状態が維持されていた。

「この遺跡にこんな場所があるとは……。こんな話は聞いたことがない」

つまり、ここに来たのはもしかすると自分が初めてなのかもしれない。そう思うと年甲斐もなく胸が少し弾んできた。
警戒心は残しつつ、少しの冒険心を胸にダレンバートは探索を開始した。

この階層は今までとは比べものにならないくらい広く、もしかしたら地下にある部屋なのかもしれない。そう思って更に奥へ奥へと進んでいくと、思わぬモノを発見した。

「こ、これは……」

人一人が入れるガラス筒の中に、腰まで伸びた白髪を持つ少女が瞼を閉じた状態で、その陶器のような滑らかな白い肌を晒して浮いているのを発見したのだ。

年齢にすれば１３、１４歳くらいだろうか。

眠っているのか死んでいるのか不明だが、とにかく神秘的な光景で、宗教に対して信仰心を持ち合わせていないダレンバートだったが、このときばかりはこの少女が天使ではないかと思ったのだった。

第一話　魔女の遺跡（後書き）

結局短いっていう・・・。一応第一章とはしたけれども、どうなることやら・・・。

第二話　目覚めた天使（前書き）

投稿。短い。

第二話　目覚めた天使

目を開けると、悲しそうな顔をした――――が自分の顔を覗き込んでいた。

――――の顔が見れたことが嬉しくて一瞬微笑みを浮かべたが、彼の顔が悲しみに歪んでいることに気が付き、訝しんだ。

「ゴメンね。今この世界は君が生きるには、少し、優しくないんだよ……」

彼の顔には強く疲労が滲んでいた。一体何が彼をここまで追い込んだのだろうか。

何とかしてあげたい。自分は彼から与えられ、守られているばかりだから、何かできることがあれば何でもしてあげたかった。

その旨を彼に必死に伝えると、疲労が刻まれた顔に嬉しさを滲ませた。

「ありがとう。でも、良いんだ。君には穢れを知って欲しくない。だからこのままここで眠っているんだよ」

ふと不安が過ぎった。とてつもなく嫌な予感がしたためだ。何だか、コレが今生の別れであるかのように。それが一体何であるか自分にはハッキリとは分からない。

「大丈夫だよ、少し眠るだけだから。君が眠ったら僕も寝るよ」

そういって彼は自分の体を冷却睡眠装置（コールドスリープ）へと横たえる。

「少し眠るだけだよ、少しだけ。少し眠ったら、朝になったらちゃんと起こしてあげるからね」

冷却睡眠装置（コールドスリープ）の蓋が閉じ始める。

もうすぐ、彼の声が聞こえなくなる。

「おやすみなさい。僕の最高傑作。僕の全て。僕の、僕の――――」

最期に彼が何を言ったのか、分からなかった。

そしてそれを知る機会も、未来永劫来ることは無い。

目を開けると、そこにあったのは親しみのある顔ではなく、見たことのない男の人だった。
整った顔立ちに、どこか獣のような精悍さを滲ませた顔。短く切られた赤髪と炎のような燃える紅眼をもった男の人だ。
どこか驚いた表情をしており、何故か彼のイメージに合わず可愛く思えた。

「生きて……たのか？」

開口一番に失礼な台詞が飛び出したものだ。自分はただ眠っていただけだというのに、何故死んでいるなどと思ったのだろう。

「生きてる。少し眠ってただけ」

体を起こそうとして、目の前の彼に抱き上げられていることに気

が付いた。
誰かに体を触れられるなんて、『彼』以外には初めてだった。そのことに対して特別思うことは無いが、何か不思議な気分だった。
ふと、辺りを見渡してみると、えらく荒れていた。それに、自分と目の前の男の人以外誰もいない。居るような気配もない。
それに何より彼が居ない。

「……ドクターは？」

「ドクター？　誰かはわからんが、ここには俺とお前以外誰もいないぜ」

「そんなはずない。この施設は約５０名を超える研究者と、施設管理職員が約３００名、軍関係者が１０００名は居たはず」

「いや、本当に俺とお前だけだ。たぶん、そいつらはとっくの昔にいなくなってると思うぞ」

「私が眠っている間にこの施設を放棄したの？　確かにこの荒れ具合をみるに、そう言われても不思議じゃない。私は一体どれだけ眠ってたの？　１週間？　１ヶ月？　それとも数年？」

「……そいつらが誰で、どこにいったかは分からんが、多分数年

どころじゃすまんと思う」

「とすれば、１０年単位？」

「正確にはわかんねーけど、たぶんここは１０００年近く前のもんだから、１０００年ぐらい経ってる？」

耳を疑った。

言うに事欠いて１０００年。嘘を付くにしてももっとマシな嘘を付くべきだろう。

そもそもこの男、怪しすぎる。鎧を身につけているが、間違いなくこの施設にいた軍の関係者ではない。

「あなたは誰で、どこの所属？」

「え……あぁ、俺はダレンバート・スナイダー。しがないアークス王国の一男爵だ。所属はアークス王国騎士団第七師団で、一応第七師団団長を務めてる」

聞いたことのない国だった。少女の顔が険を帯び始める。

「待て待て待て。怪しいだろうが本当だって。そりゃ１０００年も経ってたら国も何も変わってるだろ？」

「そもそもその１０００年というのが……まぁ調べればすぐにわかるから」

そういうと少女は立ち上がった。全裸で。少女は真っ裸だというのに、全く意に介していない様子だ。
焦ったダレンバートは自分のマントを少女に差し出した。

「これ着とけ。年頃の女が堂々と肌を晒すな」

「？　わかった」

差し出されたマントを体に巻き付け、近くにあった四角い鉄製の箱、端末を操作し始めた。
初めて見るものが気になるのか、ダレンバートが興味深そうに見ている。

「何とかコンピューターは動くね。暦は……龍王歴１１７５年……え？」

少女は信じられないものを見た。少女の記憶では、龍王歴１４３年だった筈。
それが１１７５年である。端末自体が壊れていることを期待する

が、正常に動作している。

「なんだ？　どうかしたのか？」

ダレンバートが喋っているが、それどころではなかった。龍王歴１１７５年？　確かに１０００年以上経っている。

「……確かにあなたの言う通り、１０００年ぐらい経ってる」

「お、信じてくれるか」

「１０００年経っても人間がいるということは、“闇の眷属（ダークスポーン）”との戦いには勝ったんだ」

「ダークスポーン？　なんだそれは？」

「“闇の眷属（ダークスポーン）”を知らない……ならやっぱり戦いには勝ったみたいだね」

「待て待て。一人で納得されても困るんだが」

「敵性魔法生物……そいつらを私達は闇の眷属（ダークスポーン）と呼んでる。形状は多岐に渡り、犬型、鳥型、人型、ドラゴン型等。闇の眷属（ダークスポーン）はそれぞれの種族で社会を作り、習性も種族によって違う。ただ一つの共通事項は人を襲うこと」

「それはひょっとして、魔物のことか？」

「魔物？　そういう風に昔は呼んでたみたいだね」

１０００年前も大昔だがな、とダレンバートは心の中で突っ込んだ。

「私達は“魔王（アークデーモン）”率いる闇の眷属（ダークスポーン）と闘ってきた。かなり多くの犠牲を出して、ね」

「あぁ、ってことは１０００年前本当に大戦はあったんだな」

正直なところ、ダレンバートはあったかどうか疑わしい、と思っていた。大戦が本当にあったということは、五大英雄も実在していたのだろうか。

歴史の生き証人が目の前にいる。それも１０００年前の、だ。この遺跡の設備もかなり高度なものなようであるし、この少女次第で王国にかなりの利益をもたらすことができる。

そう思ったダレンバートは、更に質問をするため話しかけようとしたが、彼女の表情を見て止めた。

「ドクター……」

彼女は筆舌にし難い感情を顔に写していた。悲しみと、怒りと、憎しみと、慈愛と、懐古と……様々な感情が交じりあったような顔だ。

１０００年も経ったのだ。彼女一人を残して。

ダレンバートにはどのような仕組みか分からないが、少女が入っていた装置は封印魔法のような効果があり、彼女の時が止められていたのだろう。

彼女の知る人達は間違いなく息絶えている。彼女は誰一人として彼等の死に目にも遇えず、また彼等が死んだことも知らずに１０００年も眠っていたのだ。

彼女の胸中を思うと、今その質問をこの小さな少女にぶつけるのは非常に酷だと思えた。

「お前、名前は？」

「え？」

「名前だよ。俺は名乗ったんだ。お前も名乗らないと不平等だろ？」

とにかく話題を変えたかった。この少女の表情を変えたかった。
彼女にこんな顔をさせてはいけない。女の子に似合う表情は、いつだって笑顔なのだ。
が、しかし――――

「名前は無いよ」

思惑外れる。
しかも地雷を踏んだ。

「え？」

「だから無い。一応他と区別するための製造番号（シリアルナンバー）はあるけど。ちなみに番号は87だよ」

「いやいやいや。製造番号ってなんだよ。それじゃまるで作り物みたいじゃないか」

「その通りだよ。私は闇の眷属（ダークスポーン）と闘うために作られた対敵性魔法生物殲滅兵器、通称“殺戮の天使（ジェノサイド・マリア）”だよ」

ダレンバートは驚いた。それはもう驚いた。驚愕の事実を一度に体験しすぎて、思考が停止してしまうほどには。

第二話　目覚めた天使（後書き）

ようやく主人公登場。今後は彼女を中心に話を展開させていく予定です。

第三話　天使の祝福（前書き）

ようやく投稿です。

第三話　天使の祝福

英雄の住んでいたとされる遺跡を探索していたら、謎の遺物を発見。中でも人間の女の子が入った遺物を見つけたため、酷く驚いたがまずは助けなければ、とよく分からない仕組みの遺物を壊すことにした。

少女の入っていた遺物の仕組みはさっぱりわからなかったが、「まぁ、何とかなるだろ」というダレンバートの適当な思考の結果、強引に開けるという浅はかな結論を叩き出した。

一歩間違えば少女は凍ったまま二度と目覚めない、という最悪の結末を迎えたことだろう。あらゆる意味で貴重なこの少女を失ったとなれば、ダレンバートの首一つでは到底間に合わない。

「え？　何だって？」

「だから私は対敵性魔法生物殲滅兵器だよ」

「いや、でもどう見ても普通の人間だ。兵器が自分の意志を持って動くはず無い」

「生体兵器とでも理解すればいい。とにかく私自身が兵器なんだよ」

「生体兵器たって……」

ダレンバートは少女体を失礼の無い程度に見る。
身長は１５０?に届こうかという程度で、線は細い。何か武器を隠し持っているワケでもないし、何より“魔力”を感じないのだ。

ダレンバートは“魔法士（ウィザード）”である。“魔法士（ウィザード）”とは魔法という奇跡を起こす術を熟知している者のことだ。
魔法の力は多岐に渡り、何も無いところから炎を出す、傷を治す、身体能力を向上させる等々の通常逆立ちしても実現できないようなことを実現するのだ。原理については未だに解明はされていないが、概ねこのような概念だ。

この魔法を使用するためには対価が必要であり、“魔力”という特殊な力を要する。この魔力は誰にでもあるわけではない。そしてこの魔力を持つ者は強弱の個人差はあれど、大抵体から魔力を発している。

つまり例え貧弱で武器を持っていなくとも、この魔力があれば普通の人間は圧倒できるのだ。少女は線が細いがあくまで自分が兵器だと主張するため、魔力ぐらいはあるのだと踏んでいたが、どうやらそうでは無さそうだ。

すると自分の体を見られていたことに気が付いた少女は無表情で返した。

「私の見た目の問題？」

「まぁ正直……」

「魔力を持つ人間が相手を見た目で判断するなんて、あなた本当に団長クラスの人？」

「何！？　分かるのか！？」

「わかるも何も、あなたさっきから魔力ダダ漏れだから、バレバレ。何で隠さないの？」

少女は不思議そうに首を傾げる。

魔力の有無は魔力を持つ者にしか分からない。つまりこの少女は魔力を持っているということなのだろう。しかし、ダレンバートから見てこの少女からは魔力を感じられない。

それに“隠す”とはどういうことなのか。

「ちょっと待て、君は魔力があるのか？」

「一応は」

「でも君からは魔力を感じない。それに隠すって……」

そういうと、少女は合点がいったという顔になった。

「あぁ、１０００年後は魔力操作の技術が失われているんだ」

「魔力操作の技術？」

「隠す（ハイド）、纏う（ブースト）、放出（ドライブ）、全開放（フルドライブ）って他にもあるんだけど、その様子だと知らなさそうだね」

１０００年前でも割と上級者向けだったけど、と呟く少女。

ダレンバートはここに来て驚きっぱなしだ。一応今でも、この少女の言う魔力を纏うことと、魔力の放出ぐらいはある。しかし、それ以外の、特に隠す技術などダレンバートは知らなかった。

１０００年前は今と比べてかなり魔法士のレベルが上だったのだろうか。

「君は魔法士なのか？」

「魔法士？」

「君のように魔力を持つ者のことだ」

「今の基準なら魔法士になるのかもしれない」

「ってことは、魔法士は１０００年前では兵器扱いだったのか？」

「違う。私のように作られた者でなくとも、自然発生の魔力持ちはたくさんいた」

「？　じゃあ何で兵器なんだ？」

「魔力の量を大幅に上げた、ということ。それと――」

そこで少女は突如言葉を切った。
顔には警戒心が浮き出ていた。

「どうした？」

「“闇の眷属（ダークスポーン）”がいる」

そう言って少女はダレンバートの背後を睨み付ける。

慌てて背後に振り返りダレンバートも警戒していると、確かに異形の姿が3つ現れた。
犬の形をしているが、人よりも大きく、体毛が分厚くて硬い。
魔物の一種“ハウンドドッグ”だ。

「ここにも魔物が住み着いていたのか？」

「あれは多分ここで研究していた“闇の眷属”。冷却睡眠装置で保存されていたんだろうけど、何かの拍子で起きたみたい」

ハウンドドッグは完全に臨戦態勢に入っており、唸り声を上げながらダレンバート達に近寄ってきていた。
鋭い犬歯を剥き出しにし、粘性の高そうな涎をボトボトと地面に垂らしている。
普通の人間ならこれだけで腰を抜かし、あっという間にハウンドドッグの餌になっていることだろう。
“普通”なら。

「君はここでじっとしていてくれ」

「何で？　私は兵器だから戦えるよ」

「君の生い立ちが何であれ、俺にとっては君は可愛い女の子だからな。騎士として、女の子に戦わせるわけにはいかんさ」

そう言って少女の前に立つダレンバート。
普段のダレンバートは多くの人間から「もっと騎士らしくシャキッとしろ！！」などと言われているほど、世間一般で言う騎士とは程遠い人間なのだが。

「可愛い……」

「あぁ。君のような可愛い女の子は、手を汚しちゃ駄目だ」

――可愛い僕の『　』、君は汚い世界を知らなくて良いんだよ

「……」

どことなく、ダレンバートの姿が、かつて少女を溺愛していた男と重なった。
容姿も性格も全く違うが、どこか重なった。
少女は胸の辺りが温かくなるのを感じた。懐かしい感覚だった。

「さぁ、お姫様を害する悪い連中は、俺がぶっ潰してやるよ！！」

ダレンバートは腰の長剣を抜きはなった。
長剣は普通の剣と違い、刀身が燃えるような紅色だ。

「燃え上がれ！　魔剣“レーヴァティン”！！」

ダレンバートが声を上げると、魔剣から目も眩むような炎が噴出し、一気に部屋の温度が上昇したのを感じた。

「喰らいやがれぇぇぇ！！」

ハウンドドッグへと駆けると、５メートルはあった距離を一瞬で詰めて懐に潜り込んだ。
そして手に持った剣を横一線に薙ぐ。するとジュッと何かが焼ける匂いと音がしたかと思うと、ハウンドドッグは体の一部を残して消失していた。

「はっ！　燃えたろう？」

魔剣の炎の温度が高すぎて、ハウンドドッグは為す術もなく燃えた、いや、溶けて消滅したのだ。
そこいらの人間ならば、ハウンドドッグの強靱な肉体の前に大した抵抗もできることなく、その牙に掛かって餌になってしまうのだが。

「強いんだ」

「当たり前だ。俺だって仮にも団長だからな。これぐらいのレベルの相手なら朝飯前だっつーの」

「なら」

少女は辺りを見回して一言。

「これだけの数も楽勝？」

いつの間にか、周囲を獣型、人型、様々な種類の魔物に囲まれていた。

その数は不明だが、数十匹はいるだろう。

「げ、こいつらも眠りから覚めたやつらか？」

「おそらく。手伝うよ？」

「問題なし。お姫さんはそこでじっとしてな」

魔剣を構え直し、再び魔物の群れの中に突っ込んでいく。魔剣に炎を宿し、嬉々として振るう。魔物は起きたばかりなのか動きが鈍く、ダレンバートの魔剣の餌食となる。
その様は、まさしく炎の嵐だった。

殆どを倒し終え、最後の一匹に魔剣を叩き付けた時、ダレンバートの表情が驚愕に染まった。

「魔剣が、効かない！？」

今までは大して苦労もなく切り伏せていたのだが、最後の一匹だけワケが違った。
魔剣の刃を通さないのだ。
鱗を持つ3、4メートルはあるトカゲのような魔物。
攻撃が通用しなかったため、慌ててこの魔物から離れる。

「ドラゴンだ。小型だけど」

「これで小型なのか！？」

ダレンバートは生まれて初めてドラゴンを見た。文献や伝説でその存在は知っているが、目で見たのはこれが初めてだ。

神の遣い。

魔物の頂点。

人の身では決して敵わない存在として知られている。

それが今目の前にいる。

「研究用に捕らえていたドラゴンだよ。幼龍だね。まぁ成龍だと研究所に入らないし、そもそも捕まえるの無理だし」

「俺ドラゴン見たの初めてだ……。これで子供だってのか？」

「そう。大人の龍だとこれの１０倍はあるからね」

「ホントかよ……」

「ちなみに私も生で見たのは初めて」

少女は興味深そうにドラゴンを見ている。随分と落ち着いている。

「幼龍といえど、ドラゴンだから普通の攻撃はまず通らないよ」

「普通って……一応伝説クラスの魔剣の一撃なんだけどな」

「それはダレンバートがその剣を使いこなせていないからでしょう？　レーヴァティンって私も聞いた事あるよ。曰く、一撃で町を焼き尽くしたとか」

「……この剣にそんな力が？」

まじまじと魔剣を見つめる。

この魔剣はスナイダー家に伝わる魔剣だ。正確に何年前かはわからないが、この魔剣を使って数多くの魔物や人間を斬り、人にも魔物にも大いに恐れられたのだという。

確かに今の一撃はダレンバートの最高の一撃ではないが、それでも町を焼き尽くす炎なんて出せない。

自分は一応国内でもトップクラスの使い手だと自負していたが、それは自惚れに過ぎなかったということなのだろうか。

――――グルォォォォォ！！

「くっ！！」

ドラゴンが咆哮する。

その振動だけで周囲が吹き飛び、危うくダレンバートも倒れそう

になった。

（子供でこの強さかよ！！）

「ドラゴンの咆哮はそれ自体に力がある。常人なら咆哮だけで死に絶える。たとえ子供と言えど、その力は他の魔物とは比べものにならない」

「解説どうもお姫様。それよりここから逃げる算段を始めようか」

「その必要はない。私がアレを殺すから」

そう言うと少女は手を天に掲げる。
すると手から眩い光が生じ、ダレンバートは眩しくて目を閉じた。
光が収まり、ダレンバートが目を開けると、少女が大きな長方形の、青と白を基調とした鉄の塊を肩に担いでいた。

「何だそれは？」

「Ｊ－２１型魔法銃。通称“天使の祝福”」

「魔法銃！？」

ダレンバートの時代でも魔法銃はあるが、銃身が1メートルもありそうな代物はおそらく無いはずだ。
精々片手に収まる大きさのもの程度だ。
よく見てみると、確かに銃のグリップらしきものがある。

少女は銃口をドラゴンに向ける。
ドラゴンも只ならぬ気配を感じたのか、動揺しているようだ。

「ごめんね。君が何か悪いことをしたというわけでは無いんだけど、消えてもらうよ」

少女から魔力が噴出し、空気が振動する。
ダレンバートはこんなに強力な魔力を感じたことは一度も無かった。

「でも強いて君の罪を挙げるとするなら――――」

ドラゴンは死を感じたのか、がむしゃらに少女に飛び掛かってきた。
決死の特攻だったのだろう。
少女はそんなドラゴンの必死な姿を無感動に眺めながら、引き金を搾った。

「その存在が罪だったんだよ」

直後、銃口から純白の光の奔流が吐き出され、ドラゴンは光に飲まれて一瞬で蒸発した。

それだけでは飽きたらず、光の奔流は天井を突き破り、外に出て天高く昇っていった。

その様子を遺跡の外から見ていたジークマイヤーは

『天に龍が昇るかのようだった』

と後に語ったという。

第三話　天使の祝福（後書き）

初戦闘。
１０００年前は科学と魔法が融合した世界観。
現実世界に魔法がある世界と想像してください。

第四話　天使の決意（前書き）

第四話投稿　短いです

第四話　天使の決意

ジークマイヤーは王城内での自室で頭を抱えていた。
彼を悩ませているのは他でもない、魔女カタリナの遺跡を『破壊』して出てきた少女のことだ。
彼の親友であるダレンバートが、英雄の遺産を持ち帰ってくるのをリンゴの果実酒を飲みながら待っていると、突然光の柱が立ち上り遺跡を飲み込んだのだ。優雅に果実酒を飲んでいたジークマイヤーだったがいきなりの出来事につい果実酒を口から噴出させてしまった。
『どんなときでも余裕を持って優雅に』をモットーとする彼にとって反省すべきことだ。

ジークマイヤーは背もたれに体を預けて溜息を吐き、例の少女が居るであろう隣の部屋の壁を見つめながら、ダレンバートが崩壊しかけていた遺跡から出てきた時の様子を思い出していた。

「い、遺跡から光の柱が！？」

「これは神の裁きか！？　それとも魔物が魔王の仇をとるために

やったのか！？」

「そんなことより英雄の遺跡が！！」

崩れゆく遺跡を前にあーだこーだと騒ぐ傍観貴族を尻目に、ジークマイヤーは混乱する頭をなんとか落ち着かせる。

「キナレス！」

「ここに」

ジークマイヤーが側近の名前を呼ぶと、碧色の鷹の紋章が施されたアークス王国の鎧を着た青年が、背後から現れた。
青みがかった黒髪と蒼眼を持つ、スラリと背の高い美青年と言っても差し支えない騎士だ。

「今の光は何だと思う？」

「正直に申し上げてわかりません。ただ、魔力の塊であったことは間違い在りません」

「ふむ。それは僕も感じた」

キナレスは魔法士であり、王国内でも屈指の実力者だ。
その腕前はジークマイヤーの親友であるダレンバートをも凌駕すると専らの噂だ。直接闘ったことは無いので、実際の所は不明だが。
ジークマイヤー自身は魔法士ではないが、魔力と魔法は扱えるため、先ほどの光の柱が魔力の塊であることをキナレスと同じく感じたのだ。

「あくまで推測ではありますが、あれは英雄の遺産によるものではないでしょうか」

「あんな強力なものがあったなんて初耳だな。過去の遺産にも例を見ない。最上級魔法並だ」

ほぅ、と腕を組み崩れゆく遺跡を見ながら感心するジークマイヤー。

「失礼ながら、殿下」

「ん？」

「ご友人であるダレンバート・スナイダー男爵が中にいると思わ

れるのですが」

「あぁ、心配じゃないかってこと？　大丈夫だよ。彼は殺しても死なないから」

自信たっぷりに告げる。

そこまであのダレンバートという騎士は信頼に足る人物なのだろうか。キナレス自身はあまり接触したことがないため、よく分からない。

「でも遺跡の方が大丈夫じゃないからね。やっぱ遺跡崩壊の責任って、僕にあるのかな」

ダレン推したの僕だし、と全く焦っていなさそうに呟くジークマイヤー。

「……殿下」

「わかった、わかった。冗談だよ。現実逃避はやめるよ。どうにかしてダレンを助けに行かないとね」

「どうやってですか？」

「どうやってだろうねぇ」

「……」

「ホントどうしようかなぁ」

「……」

完全に崩壊してしまった遺跡を眺めていると、今度は轟音とともに光の玉が遺跡から飛び出してきた。

「こ、今度は何だ！？」

「こっちに降りてくるぞ！！」

「に、逃げろ！　あれは魔力の塊だ！　大爆発を起こすぞ！」

そう言うや否や、回りの貴族達は我先にと逃げ始める。
しかしジークマイヤーは動く気配もなく、光の玉が降りてくるのを呆然と見上げている。

「殿下！　あれが何か分かりませんが避難しましょう！！」

「いや、あの大きさの魔力の塊なら、今更逃げても爆発に巻き込まれる。それに、心配ない」

ジークマイヤーはそこまで迫っている光の玉を指さす。

「中に人間が2人入ってる。しかも一方はダレンだ」

幻覚でも見えてるんじゃないかと、疑ったキナレスだったが、確かによくよく見てみると中に人がいる。
一人は紅い髪の男。
もう一人は……。

「天使？」

光り輝く髪と、金色に煌めく瞳をもった幻想的な少女。
そこにいるのに、まるで幻影であるかのような錯覚を覚えそうなほど儚げな容貌だ。

「ほぉ？　キナレスにまるで夢見る少女のような感性があったとはな？　詩でも書いてみるか」

「ご冗談を……って言っている間に降りてきましたね」

光の玉は地面に降りると消え、中からダレンバートと少女が出てきた。
ジークマイヤーはダレンバートが擦り傷ぐらいしか負っていないのを確認すると、嬉しそうに話しかけた。

「よく無事だったな、ダレン」

「ジーク……一応まだ公の場なんだが」

「問題なし。回りの連中、僕を置いてみんな逃げ出したから聞き咎めるヤツなんていないよ」

「それはそれで問題有りだろうが……まぁ良いか」

「ところで報告することあるんじゃない？　その子、いつ手を出したの？　子供はいくら何でも犯罪だと思う」

「ちげーよ！　この子は遺跡でずっと眠ってたんだよ！　それを俺が助けてきただけだ！！」

「遺跡で、ずっと……？」

信じられないものを見るかのように、少女を見つめる。
キナレスではないが、確かに神秘的な容姿をしている。しかし、これといって変わった様子はない。遺跡でずっと眠っていたと言われても正直に言って信じられない。

少女は自分が見られていることに気が付いたのか、ジークマイヤーに視線を返す。

「君は、何者だ？」

「私は対敵性魔法生物殲滅兵器、被検体番号８７」

「えぇ？　キナレス、この子どこの国の言語喋ってるの？」

「殿下、我々と同じ言葉を喋ってますよ。私も意味は分かりませんが」

ジークマイヤー達には、少女の言葉の意味が分からなかったようだ。
詳しく説明しようと口を開いた少女だったが――

「待て。ここで長話するのは得策じゃない。移動しながらでもいいから、とにかくここを離れよう」

「ダレン、どうしてだい？」

「この遺跡には地下に広大な空間がある。今のところは大丈夫だが、今の衝撃でいつ崩落してもおかしくない」

「地下まであったのか……驚きの連続だな。よしわかったさっさと移動しよう」

「それでは私は馬車を用意してきます」

「それにしても、まさかダレンの馬車しか残ってないとはな。乗り心地最悪だぞ」

「我慢しろ。それで、この子の説明は理解したか？」

「うーん、正直半信半疑だけど、あれを見たら信じるしか無さそうだね」

光の柱を思い出す。

話を聞くと、どうやらこの少女が放ったものらしい。あんなに強大な魔力を放出した後だというのに、少女は何でもなさそうにケロッとしている。

ダレンバートの膝の上で。

「うーん、やっぱりその姿は犯罪だよね」

「仕方ないだろ。狭いんだから」

「そう言って年端もいかぬ少女の肌を堪能して……」

「よほど斬られたいらしいな」

「冗談だよ。でも、柔らかそうだよね。僕に貸してくれない？」

「お前の方がよっぽど犯罪者みたいだぞ」

ほれ、と少女の脇に両手を差し入れてジークマイヤーに渡す。少女はまさにされるがままの状態であり、借りてきた猫のように大人しかった。

少女を受け取ったジークマイヤーはダレンバートと同じように膝に座らせ、抱きしめて頬ずりし始めた

「ヲイ」

「柔らかいなー。僕の妹も小さい時は『お兄様、お兄様』って抱きついてきたんだけど、今じゃからっきしだからねぇ」

「そりゃ、シシリア王女は１６になるし、いつまでもベッタリってわけにもいかんだろ」

「でも、もんのすごく可愛がってたのに。四六時中抱きしめて、一緒にお風呂入って、一緒のベッドで寝て、着替えさせて、キスも一杯してあげたのに」

「……ちょっとお前離れてくれるか？　それとその子も返してく

れ」

「冗談だよ。半分は」

半分は本当かよ。
そうは思ったが取り敢えず黙っておくことにした。

「で、問題は、この子をどうするか」

「ん？　この子は魔女カタリナの遺跡から出てきたんだから、英雄の遺産ということで保護すれば良いんじゃないか？」

「事はそう簡単なことじゃない。まず信じない人が多いだろう」

「だが、あの光の柱を見れば誰だって信じるだろうよ」

「そうだね。だが、あれは強力すぎた」

過ぎたる力は身を滅ぼす。
あれだけ強力な魔法を使える者は、国内ではおそらくいない。そんな強力な魔法をポンポン扱えるヤツがいると発表すれば、要らぬ緊張をもたらすだけだ。

戦乱の世であれば少女を如何様にでも使えたが、今のところ世界は安定している。一国が急激に強大な力を持つことは非常に危険だ。

そう考えていると、いつの間にか少女がジークマイヤーの顔を覗き込んでいた。

「私の存在は、あなた達にとって邪魔だった？」

「そんなことは……」

「良いよ。邪魔なら殺しても」

「！！」

驚愕に目を見開いた。見た目年端もいかぬ少女が、自分を殺せというのだ。

「滅多なことを言うんじゃない！」

ダレンバートが怒声を響かせる。

そんな状況に全く少女は堪えた様子もなく、淡々と述べる。

「別に私は気にしない」

「気にしないって……」

「ここは私の知る時代じゃない。私の生きる時代じゃない。私の大切な人がいない」

少女は大切な人を思い出す。

どんな時でも自分を包み込むような微笑みを絶やさず、何を置いても自分を一番に接してくれた。自分もそんな彼に応えたくて、彼の笑顔が見たくて、彼のためと思うことはどんなことでもやってのけた。

その様子に少し悲しそうな微笑みを見せることはあったけれど、彼はいつも「僕のためにありがとう。愛してる」と抱きしめてくれた。

彼に抱きしめられると胸がいっぱいになった。心が温かかった。体が満たされた。彼さえいれば他に何も要らなかった。

まさしく彼は少女の全てだったのだ。

そんな彼はもう居ない。

少女が生きた時代は今から１０００年も昔。彼が生きている筈もない。

ダレンバートやジークマイヤーに抱きしめられた時は、どこか懐かしい感じはしたが、彼に抱きしめられた時のような幸福感や充足感は得られなかった。

そんなとき感じたのだ。
自分はここにいるべきではない、と。

「だったら俺が君の大切な人になってやるよ」

「え？」

「俺が家族になる。どんなやつからも俺が守ってやるし、君のことを悪く言うヤツがいたら、そいつの顔を引っ叩く。君が寂しいと感じる時があれば、俺が抱きしめる」

ダレンバートは自分自身、なんでこんなことを言うのか理解できなかった。
だが目の前の少女を、今にも泣き出しそうな顔をしている少女を、いや、心で涙を流している少女を放っておくことはどうしてもできなかったのだ。

「それとも、俺では不服か？」

「よく、わからない」

「だったらこれからわかればいい。幸いにも、君の味方はいっぱいいるんだからな。なぁジーク」

「そうだね。僕も微力ながら君を助けたい。何より、困っている女の子を助けないのは男じゃないからね」

そう言って少女に向かって微笑みかける二人を見て、少女は心が温かいもので満たされるのを感じた。

「……温かい」

ここに彼はいないけれど、今目の前にいる二人のために生きてみよう。

そう少女は心に決め、微笑みを浮かべた。

第四話　天使の決意（後書き）

短いですが、第一章終了。
第一章というよりは、序章の延長みたいなものでした。
次章からが本当の第一章だ！　ってところでしょうか。
次は説明の話になるかもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0811z/

英雄の遺産

2011年12月11日16時49分発行